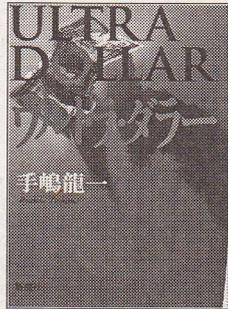


# 国際報道の視線が結実

昭和四十三年、荒川区の若い彫刻職人が忽然と姿を消した。それから三十五年、ダブリンに超精巧偽百ドル紙幣(ウルトラ・ダラー)が現れる。震源地は「北」。機密情報をつかんだBBC東京特派員・ステイブン(英国諜報部員)、内閣官房副長官・高遠希恵、そして米国財務省シークレット・サービスが調査を開始する。

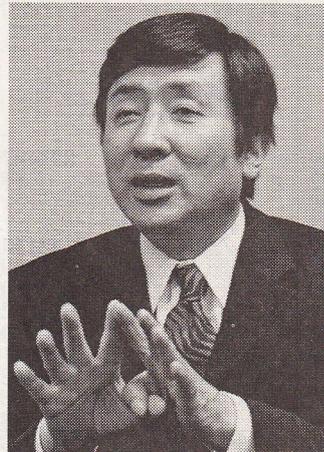
息をのむような情報戦の過程で、拉致、通貨テロ、マネーロンダリング、偽ドル検知器をめぐる駆け引き、買手を手待つウクライナの巡航ミサイル……といった衝撃の事実が次々とあふり出されてゆく。本書をエンター

テインメントとして楽しんだ後、読者は日本という国に決定



的に欠けている《あるもの》に気付くことになる。

NHKワシントン支局長として知られた手嶋龍一さん(写真)は昨夏、NHKを退職し、小説『ウルトラ・ダラー』(新潮社)の執筆に専念していた。小説を構成する素材のほとんどが真実。それらを《9・11》以降



の世界情勢の中で構築した。

「《9・11》以降、極東の現状列島が《インテリジェンス》へと突き進んだ。その結果、東

抜きに生き抜くことは困難、という問題意識が、この小説を書かせたといえます」と手嶋さんは執筆の動機を明かす。

そう、《あるもの》とは《インテリジェンス》である。本書の登場人物の言葉を使えば、「さかしらな人間の知恵を離れ、神のような高みにまで飛翔し、人間界を見下ろして事態の本質をとらまえる力によって彫琢し抜いた情報」である。

長年、国際政治報道に携わってきた手嶋さんは、《9・11》を戦後日本にとっての分水嶺と見る。この事件によってアメリカは自らの進路をねじ曲げ、アフガニスタン、イラクとの戦争へと突き進んだ。その結果、東アジアにおいて長期にわたるアメリカの「不在」が生じた。それは取りも直さず、日本の安全保障に直結する。

「戦後の日本は安全保障をアメリカに委ね、国としてもっとも大切な事柄への関心を摩滅させてきました。イラクにおけるアメリカの失敗のツケを一番多く払わなければならないのは、ほかならぬこの日本なのです」

柔らかな口調だが、日本へ注ぐ眼差しは冷徹だ。だが、「小説として楽しんでいただけましたか? 登場人物の中で誰が好きですか?」と記者に問う表情には、「新人作家」としての初々しさがあつた。

## 小説家「手嶋龍一さん

(桑原聡)